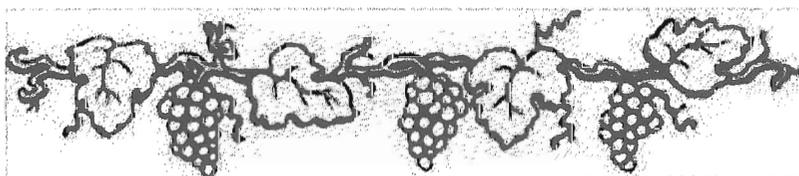


第91号

井戸端だより

発行日：2015.9.24

発行：くらしの学習会



も く じ

- | | | |
|----------------|------|-------|
| ・例会報告 | 7月 | p. 2 |
| ・例会報告 | 8月 | p. 5 |
| ・戦後70年 第13回平和展 | | p. 7 |
| ・夏休みの家族旅行 | | p. 9 |
| ・映画と京都 | | p. 13 |
| ・短歌 10首 | | p. 15 |
| ・行ってみたオーストラリア | | p. 16 |
| ・雑感 | | p. 25 |
| ・お知らせ | 編集後記 | p. 28 |

7月例会報告

7月11日（土）会員3名は、愛媛大学で行われるイベント参加の為、中央公民館を10時に出発。久しぶりの愛媛大学（2010年6月愛媛大ミュージアム見学以来）、キャンパス内の変貌振りに驚く。芝生のスペースが豊富にあり並木の通路は石畳、そこには浅い水路が作られサラサラと流れがあり、過ごしやすい空間が広がっていた。

学内で仕事をしているHさんの道案内で7月27日まで開催中の特別展「体感する4次元宇宙の世界」を体感するため『愛媛大ミュージアム』へ。2010年訪れた時よりも展示室が広く感じる。昆虫類の標本・珍しい鉱物や化石・学内の先生方が研究された成果が分野ごとに展示されている。特別展は時間で区切られていたので11時からの分に入場。会場で3Dメガネを渡され着席3Dメガネ越しに市内の夜空から大気圏を突破し、太陽系から銀河系、現在人間が見ることのできる「宇宙の果て」の139億光年先までの旅が体感できる。ただ、3Dメガネをかけてはいたが、私には立体的には見えなかった感じであった。後での話で、HさんやKさんには向かってくる惑星や隕石などが手を伸ばせば触れる事ができそうな感じに見えていたようだ。この差は何だったのだろうか???この後、理学部の学生さんによる今夜の松山の空に見える星座についての解説を受けた。20数年も前、息子が宇宙の世界にはまっていた時期、コミセンや県立科学博物館を訪れ、頻繁にこうした世界に触れることがあったが、最近は全くチャンスが無かったので新鮮な気持ちで宇宙への世界に思いをはせることができた時間だった。

午後のイベントは14時からなので、昼食を取る為、学外へ出ることにし、駐車場へ向かう。途中の大木の並木に目をやると、空に向かって真っ白な花弁があちらこちらに見える。タイサンボクだとHさんから聞く。大木の根元には盛り上がる様に力強い根が見える。こんなに立派な並木になるのに一体どの位の年月が必要なのだろうか。運よく手が触れられる低い位置に花卉の付いた枝のある木を見つけ、白モクレンの花を3倍程大きくしたタイサンボクの花の香りをかいてみた。ジャスミンの香りを優しくしたような上品な香

りにうっとり。その枝には花卉が散った後の種子（まつぼっくりの様な形）も付いていて、Kさんに写真を撮ってもらった。足元には沢山の種子が落ちている。花盛りの時期には香りが漂い素敵な空間を楽しむことができることだろう。

大学の近くにある有名な中華料理の店へ。円卓のあるお座敷に通され美味しい料理をお喋りをしながらゆっくりと頂いた。午後の開場が1時30分からだったので、同時間に店を出、再度、愛媛大学へ。

会場は南加記念ホール。受付をしていると聞き覚えのある声がある。振り向くとT.Sさんが長男のT君を連れ来ていて、しばらくお目にかかっていたので嬉しい出会いとなった。T君とは小学校1年の頃お宅訪問して以来、6年生になっていた。受付を済ませ会場の席に5人並んで座った。T.Sさん曰く、彼も宇宙に魅せられていてこの夏休みにはJAXA主催のサマーキャンプ（全国で40名募集）に参加することが決まっているそうだ。夢を持ち続け実現できる将来がT君に訪れますように。

このイベントはガリレオが人類初の望遠鏡で宇宙を見た年から400年が経過した2009年を『世界天文年』とし、この年からこの時期に毎年「七夕講演会」を開催しているそうだ。映像を見ながらの講演会で、前半は講師：鳥羽儀樹氏による七夕→銀河→宇宙について。七夕に因んで夏の大三角（デネブベガ・アルタイル）から始まり、星雲・天の川・アンドロメダ銀河などの話。後半は講師：小林正和氏による銀河と宇宙の意外な関係について。ハッブル望遠鏡から見えてきた宇宙の話なのだが、素人の私にはどう説明したらよいのか難しすぎて無理な内容でした。ただ、午前中聞いた話しが予習になった様で、結構耳に届いた内容があり、非日常の話に結構脳への良い刺激になった時間だった事には間違いない。

講演後、参加者からの質問時間（大人の難しい内容の質問が多かった。子供達も手を挙げていたが気が付かなかったのか当ててもらえなかったのが残

念だった) 4時過ぎ閉会となった。外へ出てT.Sさん親子とここでお別れし、帰路に就いた。

この後 [15日NASAが冥王星・衛星探査機ニューホライズンズが冥王星に最接近一時間半前に7万7千kmの距離から撮影した画像を発表。23日「中年の星」油井亀美也氏がソユーズロケットで国際宇宙ステーションに到着。宇宙飛行士の水や食べ物を乗せ打ち上げられた無人宇宙船「こうのとりのとり」5号機が国際宇宙ステーションに到着。油井氏がロボットアームを操作し「こうのとりのとり」をつかみ取り付けた。「こうのとりのとり」には、水をきれいにする装置の交換部品や、宇宙に大量にあるのに正体が不明のダークマター(暗黒物質)を探すための実験装置も乗せていた。(愛媛新聞・ジュニアえひめ新聞より)] 宇宙関連のニュースが流れ、空を見上げたり宇宙へ思いをはせた人が多くなったのではないだろうか。(A.M)

(愛媛新聞・ジュニアえひめ新聞より)



油井さん キャッチ

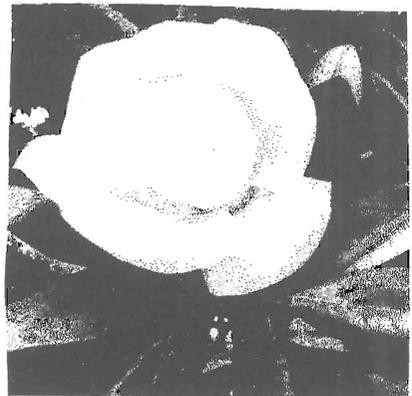
冥王星、衛星 探査機撮影 NASAが公開
山々や断崖 画像鮮明

ワシントン共同 米航一切る断崖が確認された。宇宙局(NASA)は15日、冥王星を方角には無数日、無人探査機「ニューホライズンズ」が落下した冥王星への最接近しているはずなのに、表面近一時間半前に7万7千kmの距離から撮影した画像をいこと判明。NASAの発表した、地表にある氷でできた直径約300kmの地質学的な活動が内部で山々が鮮明に捉えられていて、纏いいて可能性がある。衛星カロンの画像にはと指摘し、謎の解明に意欲約下、にわたって地表を横を覗かせた。



探査機ニューホライズンズが13日に撮影した冥王星の衛星カロンの。地表を長さ約千*の崖が横切り、北極に黒い領域が広がっている(NASA提供・共同)

愛媛大学城北キャンパス構内 泰山木



8月例会報告

7月26日（日）坊っちゃん劇場に於いて『第11回東温市民大学』が開催され活動会員4名で参加をした。内容は、13:15～講師 高橋 知伽江 先生（「鶴姫伝説」脚本・作詞）による講演。14:10～ミュージカル「鶴姫伝説」の観劇。

講師の高橋 知伽江先生（劇作家・翻訳家）は劇団四季、新神戸オリエンタル劇場を経て、1997年よりフリーランスで主に舞台作品で戯曲の執筆、翻訳、訳詞などを手掛け、坊っちゃん劇場のミュージカルでは「鶴姫伝説」「誓いのコイン」の脚本・作詞を担当。映画作品においては「アナと雪の女王」をはじめとしたディズニー映画の楽曲の訳詞などで活躍中※受講生募集パンフレットより※

劇団四季などの大都会の大舞台でロングラン作品に携わっている高橋氏が、四国の小さな市に一年にわたり同演目の上演をしている劇場があることに驚いたようだ。「奇跡の劇場」だとおっしゃっていた。かけがえのない友情、純粋な恋、そして平和への祈り。昨今、心が痛む報道が多い中、先生の話は大いに同感できる講演だった。

再演のミュージカル「鶴姫伝説」は、瀬戸内のジャンヌダルクと言われる鶴姫が幼くして龍神から使命を授かり、海の平和を守るために戦ったと言われるヒロインで、その勇氣と氣高い姿は遺された鎧と共に長く語り継がれている。幕が上がった舞台には海岸の岩や水軍の船などに角度を変えることによって変化する大道具が二つあり、それらを動かすことにより物語が進む。鶴姫を心から愛し命を捧げる若い海将クロタカ、女として鶴姫の気持ちを知り窮地を救おうとする幼馴染みのカモメ、恋と友情と一族の運命が交錯する中、平和を願う鶴姫はクロタカと共に海へと消える。平和になった海辺には鶴姫の鎧が残された。※罫線部分は坊っちゃん劇場パンフレットより※

フィナーレを盛り上げる歌では「平和になったら矢を折り鎧に花を飾ろう」と。感動のシーンに思わず涙が込み上げてきた。キャストの皆さんの素晴らしい歌声、迫力ある演技、そしてクロタカを思い鶴姫が奏でる横笛の音、胸

が一杯になるほどの素晴らしい舞台でした。感動を維持しつつロビーに出るといつもの様にキャストの皆さんが待ち受けてくれていて、直接感謝の気持ちを伝える事ができる場が用意されている。高橋先生も気軽に握手に答えてくれ、観劇の余韻を感じながら劇場を後にした。(A.Ⅲ)

2015年7月12日愛媛新聞に「坊っちゃん劇場」の記事が出ていた。内容は「来年、10周年を迎える坊っちゃん劇場。会館以来、学校単位で来場してもらう「こども観劇」に力を入れており、年間約2万人が訪れている。観劇料などを一部補助する「子ども舞台芸術体験サポートシステム後援会」（森田浩治会長）の取り組みが好評。希望する学校も年々増加しているが、後援会の資金が追いつかず「今年度は予算段階で断らざるを得ない」（同劇場）悩ましい状況となっている。

後援会は09年、子供に古里への愛着や誇りを持ってもらおうと、県内の行政、経済界、教育界などが一体となって創設した。会員は個人（年会費一口5千円）団体（2万円）法人（3万円）の3種類。年会費5千円につき観劇チケット1枚（3600円相当）を提供しており、実質的には残った額で児童・生徒の観劇料や交通費の一部をまかなっている。が、資金を提供する会員の数は後援会発足以来ほぼ横ばい状態が続いている。劇場によると、14年度は法人155、団体39、個人1077。助成金などを含めて年間1700万～1800万円の予算があるが、利用校増に対応できず数年前から蓄えを切り崩しており、14年度には赤字が出たという。

子供の「心の栄養」となり得る舞台芸術だが、その教育的効果は、勝ち負けや数字など分かりやすい形に表しづらい。それだけに支援者の裾野を広げるには、観劇の魅力やメリットを広く知ってもらえるような粘り強い取り組み欠かせない」とあった。（内容については抜粋しています）



坊っちゃん劇場パンフレットより

画：智内兄助



(愛媛新聞 より)

戦後 70 年 第 13 回平和展

戦後 70 年、第 13 回平和展が松山市コミュニティーセンターで開催されました。7 月 28 日の最終日に猛暑の中、市駅から歩いて往復し、久しぶりに足のあることを知りました。夏休み中なので子ども達が来ているかなと見渡しましたが、高齢者が殆どでした。主催者に聞くと子供はのべ 50 人位で、中には毎日来て写真を撮ったり夏休みの自由研究の文にまとめたり、関心を示した子供も居たということでした。

さて今回の平和展で一番に目にとまったのは、分厚い綴りの『大海令』大本営海軍部命令の復刻版でした。この綴りは昭和天皇が、軍令部総長を通じて各司令長官に海軍作戦の大綱を示したものです。戦後、占領軍による昭和天皇への責任追及を恐れた関係者が秘匿していましたが、その後公開され 1978 年、復刻版が刊行されました。第 1 号は昭和 16 年 11 月 5 日、天皇臨席の御前会議の決定を受けて作戦準備を命じたものです。

中ほどの頁は紙質も悪く、ガリバン刷りの箇所もありました。海軍に関する事項の実施の細目を指示した『大海令』がよく残っていたものだと思います。陸軍に関する『大陸令』もあるはずだが原本は現存しないとのことでした。これも責任追及を逃れるために秘匿されたものと思われる。

思い起こせば 2001 年 10 月に松山市主催の「松山平和資料展」がコミュニティーセンターで開催されました。そこで二人の言葉が忘れられません。

1945 年 2 月 14 日、近衛文麿氏は『日本の危機は迫っている。一日も早く戦争終結の方途を』と天皇に上奏、しかし聖断が下らず、この時決断すれば東京大空襲も沖縄の地上戦も、広島、長崎の原爆もなかったのです。また米国バーンズ国务長官は『原爆は日本を破るために必要でなく、ソ連をコントロールするために使った』と言っています。後に「戦争を終結させるために原爆を落とした」と米国は言うが、うそです。原爆投下時期はすでに日本は戦力を失っていたのです。戦争を美化するのでなく過去の歴史を正しく教え、伝えていかなければ、再び同じ過ちを犯すことになりはしないかと心配です。

さて平和展の展示品は次の通りです。焼夷弾弾頭、戦災地図、焼け跡再現、赤紙、飯盒、ゲートル、飛行帽、慰問袋、千人針、奉公袋、買出し袋、出征幟、日の丸寄せ書き、義手、遺書、軍隊手帳、防空用電球、衣料切符、たらい、火鉢、バリカン、柱時計、算盤、お札、戦時中の学校日誌、昭和 18 年児童書、松山の軍事施設につい

ての資料、終戦後の松山上空写真、アジア太平洋侵攻大地図、戦前戦中の復刻新聞など資料が多数展示されていました。特に日の丸の寄せ書きは主人のを思い出し、『教育ほど恐いものはない。死ぬことを恐いと思わなくなる』と言ったのを覚えています。私にとっては懐かしく悲しい品々でしたが、戦争を知らない人達にはどう映るのでしょうか。

さて8月30日、国民のただならぬ熱意が燃えあがりました。安倍政権が強行突破しようとしている安保法案に対し、国会前を埋め尽くした12万人の人々の「戦争法案、絶対反対」コールが地鳴りのように響き渡ったそうです。雨が降っている日曜なのに、お年寄りや若者や子供連れの女性もたくさん来ていたといえます。子供や夫を戦場へ送り出してはいけないと、女性達も立ち上がったのです。これまでのデモとは全く違った思想信条、立場を超えた広がりだったそうです。

ここまで書いた時、来客がありました。82才の山本さんでした。お茶をしながら体験談になりました。「小学校5年の時、松山は空襲にあい焼け野原になった。弟の手を引いて逃げた。川の中で夏ぶとんを濡らしてかぶり、焼夷弾の落ちるのを眺めた。寸断なく降る光は夜空を昼間のように明るくして、花火よりきれいだった。県庁を残して高い建物がなかったので広島へ原子爆弾が落ちた時のきこ雲がよく見えた。父が重病だったので戸板にむしろを敷いて運ぼうかと皆で話し合っていたら、父はお先にと死んでしまった」と、淡々と語られました。そして、人間は賢くないのではないか、同じ過ちをくり返している・・・と。

ひとたび戦争になれば、弾が飛び交う場所だけが戦場ではなく、女性や子ども達にまで被害が及ぶという事を肝に銘じなければならないと思います。そして「進め、進め、兵隊すすめ」という歌がありましたが、このような歌を再び若者が口ずさむことのない事を祈ってやみません。

(S.M)



夏休みの家族旅行

7月21日、東京上野駅 AM8:54 発の東北新幹線のホームに白と青の車体に中央のピンクの線が一段と映える「やまびこ」が滑り込んで来た。大宮～宇都宮～郡山～福島を経て仙台までの新幹線の旅。前日ピアノ・バイオリンのコンサートを終え、夏休みに入ったばかりの孫と一緒に親子3代5人の旅。一面緑の関東平野を突っ切って行く。秋になるとその緑が金色に変わるこの広大な関東平野の四季折々の顔を想像してみる。2時間足らずで仙台駅に到着。昼食に仙台名物の「牛タン」を堪能した後、息子の運転するレンタカーで一番目の目的地石巻市に向かう。

石巻市は2011年3月11日の東日本大震災で宮城県下最大の人的被害を受けた。標高56mの日和山に登ってみた。嘗て松尾芭蕉・石川啄木・宮沢賢治なども訪れ、今では公園として市民の憩いの場となっている所。あの日、雪の降りしきる中をこの高台へ避難した人々は、家や車や人が津波にのまれ一瞬に破壊されていく自分たちの町を呆然と見ていた。何度もテレビで見たあの光景を思い出し、荒れ狂う水が襲ってくるようで、思わず手で口を押えた。前方にお寺があり、傍らにかなりの数の墓石が見える。地面が揺れ、波が襲ってきた時の恐ろしさを、ここで語りあっているに違いない。語り合う仲間がいて魂は救われるに違いない。

心を落ち着け目を凝らし現状と向き合う。遠く石巻湾は波静かで、旧北上川の河口に架かる日和大橋近くの漁港には水産関係の建物が立ち並んでいる。視線を180度移すと日本製紙石巻工場から数本の煙が立ち登っている。防波堤の内側の更地からはドドドー、ガー、ガチャーと数台のブルドーザーが盛土をしている。瓦礫を撤去したあちらこちらに緑が生い茂っている。

日 and 山を下り、その場所に車で移動した。東西南北に幾筋もの幹線道路が出来、その脇には草に隠れながらも家屋の基礎の部分は確認できる。立ち入り禁止を避けながら、『がんばろう！石巻』の献花台へ行って見た。傍の立て札に『この火は被災した石巻地域から木片を集めそれを種火としました。東日本大震災から一年、亡くなられた方への追悼の思い、生き残った私たちの“がんばろう”とする思いを心に残したくて燈しました』と記されていた。この土地で商売をしていた人が周りの木片を集め大きな看板『がんばろう！石巻』を建てたのが始まり。この場所には6.9mまで津波が来たという。木枠のプランターには、日日草・マリーゴールドの花が咲き千羽鶴も、周りの空き地にはひまわりが咲いている。

防潮堤・防波堤・選別した瓦礫の山・復興しつつある石巻の街並みなどを見なが

ら一日目の予定を終え宿泊先松島の新富亭へと向かった。

2日目。AM4:30日の出を見ようと息子の車で日の出スポットの双観山展望台へ行く。生憎雲に覆われ諦めていたところ10分後雲の切れ間から光が差ししてきた。松島湾に浮かんでくるこれが『松島の朝日』と納得する。

バイキング朝食を済ませ、遊覧船に乗る前に五大堂見学。松島海岸に突き出た赤い欄干、透かし橋を渡ると五大堂。観光マップによると『807年坂上田村麻呂東征の折に毘沙門堂を建立したのが始まり』とある。

次はAM9:00出発の松島湾内一周コースの遊覧船に乗る。他にお客さんはいない。船長さんの案内で50分の時を楽しむ。湾内には260の島があるという。形のいい松、奇妙な形の島、波に洗われ穴の開いた島、大小それぞれになるほどと思える名前がついている。例えば、雄島・双子島・大黒島・毘沙門島・兜島・鎧島・馬放島・・・など。こんな美しいところにも津波が襲ってきたのかと松島湾の穏やかな水面を照らす朝の陽ざしを浴び、空気を吸いそして景色を楽しんだ。

さあ、次は待望の瑞巖寺。右側には約400年前、岩に多数の仏像やお墓を掘ってある洞窟群を、左側には杉並木のある歩道の先に、あの有名な民謡『斎太郎節』に出てくる瑞巖寺。生憎瑞巖寺本堂は修理期間中(平成28年春頃まで)のため庫裡を通り広い仮本堂に安置しているご本尊(観世音菩薩)・大位牌(政宗公 忠宗公)・三代開山木造の特別公開を見ることになった。顔を近付けて間近で見られたのは幸運だった。

入口で借りた杖に助けられ坂道と階段を登った所には寶華殿がある。伊達政宗公の正室陽徳院の御霊屋。さすが絢爛豪華で外見は黒漆や金や極彩色に彩られている。

瑞巖寺の傍にある円通院、伊達政宗公の嫡孫光宗公の菩提寺で、『バラの庭』『小堀遠州作の庭を移設したといわれる庭』『天の庭と地の庭』などがある。ちょうど季節は夏、手入れはされているものの色彩の美しさは感じられなかった。

少し歩き疲れた所で昼食。『三陸の新鮮な魚介類や海産物を豊富に品揃え』の看板やのぼり旗に誘われて松島さかな市場へ。新鮮抜群のまぐろの握り寿司・いくら丼・うな重などそれぞれ好みの品で満腹。

すぐ隣の建物 みちのく伊達政宗歴史館。

建物には被害がなかったものの泥水が奥の奥まで入ってきたが、スタッフと全国から集まったボランティアのおかげで1か月半後にはオープン出来たという。

館内に一步踏み込むといきなり蠟人形の数々。みちのくの偉人たちが県別に展示されている。『幕末より明治に至るまで、白河以北、一山百文 など、後進地扱いをされていたみちのくの地に、如何に多くの人材が生まれたか・・・』と説明書き

がある。青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県ごとにほぼ実物大と思われる蠟人形 45 体、その顔その目が存在を主張している。

順路は、伊達政宗の生涯を蠟人形で再現している 1984 年に開館した展示場へと進む。独眼竜・伊達政宗の 1567 年誕生から 1636 年までの波乱万丈の人生。奥州の名門伊達十六代輝宗の長子として生まれ、幼名は梵天丸、元服して藤次郎政宗。儒学者から漢学を学び武道にも秀で戦陣に臨みその折々の場面を音声の解説付きで展示されており、それぞれから気迫が迫ってくる。その細やかな表情表現、蠟人形の精緻さに感嘆した。強さゆえに秀吉に疎まれたにもかかわらず、特異で奇抜な発想で秀吉をうならせ納得させていく過程が面白い。すっかり忘れていたが、歴史の教科書で習った支倉常長のヨーロッパ使節団の話、これは政宗公が発想し実行させたということ。

最後の目的地は岩手県平泉にある世界遺産中尊寺。東北自動車道を走る。中尊寺は天台宗東北大本山の寺院。『寺伝では円仁の開山とされているが実質的な開基は藤原清衡で奥州藤原氏の三代ゆかりの寺であり平安時代の美術・工芸・建築の粋を集めた多くの文化財を有し、2011 年に世界遺産に登録されている』とパンフレットに記されている。

中尊寺は標高 130m ほどの東西に長い丘陵にあり、なだらかな坂道の両側には樹齢 300 年あまりの老杉が木陰を作り多くの堂塔が点在している。その中で何といっても金色堂と本堂が素晴らしい。

金色堂は 1124 年藤原氏初代清衡公によって上棟され、ご本尊は（阿弥陀如来）、堂全体を金箔で覆い皆金色の極楽浄土を現世に表しているという。目の前にある須弥壇その中央の壇には初代清衡公、向かって左の壇に二代基衡公、右の壇に三代秀衡公のご遺体と四代泰衡公の首級が収められているという。当時人々からあがめられ、権勢を振るったかがよくわかる。金色堂の立て札を見て眺めたゆるい階段の先の杉に囲まれた暗い感じの堂塔。一步踏み入れるや言葉を失うほどの金色堂。解説を聞き見終わった後の大きな溜息。一瞬でも味わった極楽浄土の世界。不思議な感覚だった。

中尊寺の本堂。『中尊寺』と重厚な文字の門札。石段を上がって境内に入ると棒杭に囲まれた中に広く伸びる枝を竹で支えた赤松があり、その向こうが本堂。ご本尊は（丈六の釈迦如来）1丈6尺（4.85m）というほどあって迫ってくる。内陣には天台宗の総本山である比叡山延暦寺から分火された不滅の法灯が灯されている。

弁慶堂に寄ってみた。武蔵坊弁慶、思い出すことがある。50 歳で亡くなった 2 歳上の姉は体格がよく小学校 6 年生の時学芸会で武蔵坊弁慶を演じた。そのとき勸進

帳を広げ「つらつらおもんみれば釈迦如来かくれましてより 2000 年しだいしだいに つみのよとなる・・・」と一緒に台詞を覚えていたことを思い出した。姉に会えた。一緒にお参りできた。そんな気がした。

汗をふきながらかなり長い距離を歩いた。私の歩調に合わせてゆっくり歩いてくれた夫や息子に感謝。そして 2 日目の宿に向かう。

夕食時、ぐらぐら～と揺れた。あっ地震！宿の人に聞く。「気が付かなかった」と。震度 3 位では慣れっこになっているのだろう。「震災後観光客は減った。水族館が駄目になり仙台へ移ったため特に若い人達が少なくなった」と。

翌日、空模様を気にしながらレンタカーで仙台駅へ。なんとか雨に会わずに済んだ。仙台発 10:41～東京着 12:43。羽田発 15:00～松山着 16:25 我が家に 18:00 過ぎには帰宅できた。猫が待ちかねていた。

今回の旅行計画は、小学校 6 年生の孫娘の夏休みの宿題探しと東北の被災地を見たいということから実現したもの。おかげで私自身もずいぶん勉強になった。70 歳を過ぎてから体の機能が徐々に衰えていくのを実感しつつある今、歴史を勉強することは精神を強くすることだと思えた。この原稿を書くにあたって、少しでも正確にと思うと、あまりにもあやふやなことや知らないことが多かった。今やインターネットの世界、その殆どを解決してくれた。

さて、孫の宿題はどんなものができあがったのか興味津々。いつか見せてくれるかな。

(S・K)

ジャコウアゲハ 2015. 7～9

急に気温が下がってきた。夏の間元気だった蝶に変わりトンボが飛び交っている。我が家のジャコウアゲハは今年も 3 度に渡り、卵～成虫への成長過程を見せ、優雅な舞を楽しませてくれた。今は時折数頭が飛んできてはランタナやデュランタの蜜を吸っている。一方、殆どが幼虫状態。少なくなったウマノスズクサの葉っぱを競い合って食べている。この 2～3 日の間に蛹になり冬を越すことになる幼虫は 8 個ほど確認できる。この分だと来年も楽しめそうだ

(S・K)

京都と映画

銀幕に映る京都の景色をここに書こうというではありません。市中を歩いて出会ったことを二、三お話し致します。

かの北野天神ゆかりの紙屋川の畔にある通称「だるま寺」。その名の通り夥しい達磨のコレクションが。その境内の衆聖殿には、等身大以上の大きな仏涅槃木像が横たわる。そこは又キネマ殿として映画人六百有余名の霊を祀っている。裕次郎、ひばりは元より、古いところでは日本映画の父牧野省三他名優の位牌がびっしりと並ぶ。尾上松之助、大河内伝次郎、坂東三津五郎、望月優子、田中絹代と到底枚挙し切れない。毎年決って追悼が催され、名だたる映画関係者が多数集い、講演会も開かれる。正しく京都である。

炎昼の中、此所を通りがかった時、一句が生まれた。

入道雲沸く達磨寺の大屋根に

実は入道雲は一つではなかった。四方よりムクッと寄り合って、その下のお堂の天井には、巨大な達磨の頭に顔が描かれている。天象気象の為すところではあれ、一瞬いいものを見たと言歌に認めた。

達磨寺大屋根の上四方より入道雲らの寄合う真昼

太秦(うずまさ)については、よく知られ訪ねられた方々も多いでしょう。私は昭和50年代も終わりの頃、大阪にいて、うちの2人の子のこども会で、太秦に来た。一步踏み込むなり、電線をしのびの忍者が這ってゆくのを見上げたことを思い出す。今、平成では、もうこども達は大阪のUSJのハリウッド・ポッターに人気集中。何か隔世の感がある。

同じ太秦の地に、大映通り商店街がある。幸いこの商店街はさびれてはいない。商店街の左右両側は、映写機にかけるフィルムを模して、一コマ2m×5mくらい、映画フィルムさながらに、ずうっと黒く舗装された通りが何キロかにわたって続く。世界のどこかにこんな道はあるのだろうか。ここを多くの男優女優が闊歩しただろう。その途中にキネマキッチンが。面白そうと入り、昼食。この店のお気に入りか、かの若々しくりりしい市川雷蔵の大写真や、数々の映画ポスターが、所狭しと貼られ、夫と共に往時をしのんだ。

いかに名優たりとも食するものは同じ。庶民的なものが、いわゆる京のおばんざいが、バイキングで。女性向けヘルシーなもの、わがまメニューとお気に召すまゝ。時に映画上映会も。設備万端。映画好きが集まり談笑尽きぬことであろう。まちかど映画博物館でもある。

さらに進めば小じんまりではあるが、鳥居が立ち、一神社が辻に見える。入口の大きな石碑には、日本映画の父牧野省三顕彰之碑が。ぐるり玉垣の右には、伴淳三郎、大河内伝次郎等々大スターの名が刻まれている。勿論社殿ご神燈あり、立派なお宮である。

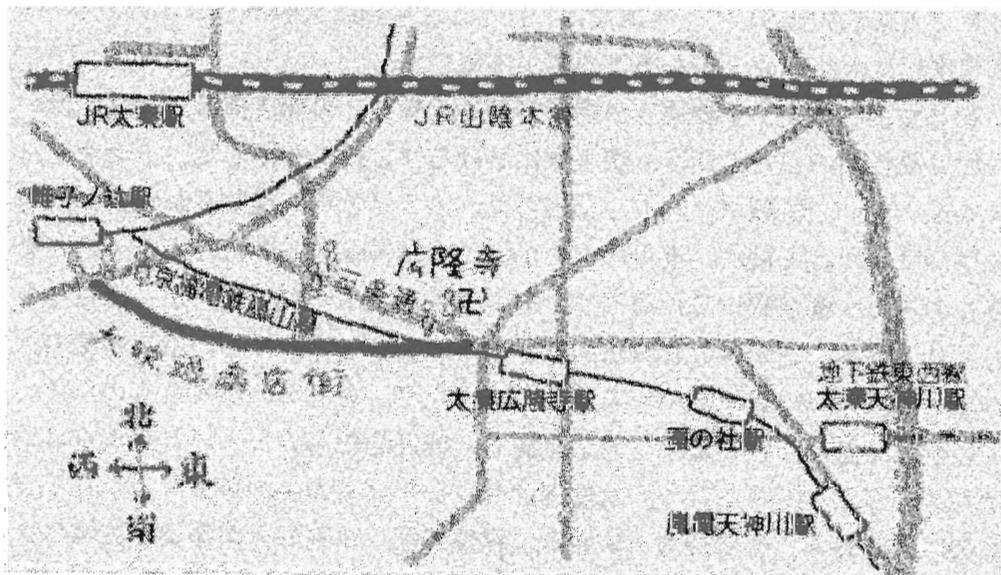
やがて当商店街より少し折れて入ると、松竹スタジオがあった。何の表示も看板も見当たらなかったが、体育館を四倍にしたくらいの四角な建造物の中で、映画製作が日夜進められているのであろう、見学は不可。

随分古くなったとは言え、この通りに、巨大な大魔神の像が聳え立つ。こどもの守護のためと記されていた。昨今の自動誘拐殺害の事件が後を絶たない日本、大魔神は何者が為し得るのであろうか。

時として、有名なスターが、この通りを歩み、キッチンに座し、商店の映画好きのお馴染みと話を交すこともあると聞く。

この一文、どう締め括ったものか？ ともかく京都は映画好きなのである。「日本の東洋のハリウッド」と呼ばれた映画都市であった。そもそも初めて「映画」というものが日本で映写されたのは、明治30年2月雪舞う中、京都電燈会社の庭にスクリーンを張っての試写実験であった。ご関心のある方は、光村推古書院「それは京都ではじまった」著・黒田光子、著者は愛媛県人である。まだまだ書きたいことがあります。私は映画好きでも通でもありませんので。

(M・D)



短歌十首

- 法師蟬まだ薄暗き九月あさ夏もおわりと季節のわかれ
- セミのこえ止んで暑さが這い上がり汗が背中を伝いて落ちる
- 高温の「注意報」が発せられ溶けて流れて終いたいなあ
- この夏の暑さ厳しく「猛暑」と呼ぶに相応し体温を超ゆ
- 蝶の羽化翅伸びきれずアリの餌これも輪廻か自然の摂理
- 硝子窓外に張り着く小ヤモリ等採餌の時は瞬時の技
- 柔らかさ故に神秘のまどひらく虫の羽化観る夏の深夜に
- 部屋のなか闇に突きいり鈴虫はこれ幸いと揃いて鳴きぬ
- クマゼミや胸板黄色上にしてまだ天空を駆けるつもりか
- アブラゼミ六十路を超えて蘇る脱皮の神秘新鮮に見ゆ

(A・N)



行ってみたオーストラリア

8月29日夫と共に松山を発ち、オーストラリアに行ってみた。今回の旅は、15年前夫が研究のために3か月住んだことがあるメルボルンの友達に一度奥さんを連れて来いと言われていたのを実現した旅でもあった。今回はそのメルボルンへの旅に世界複合遺産（自然、文化遺産）のエアーズロック行きを加えたものとなった。

8月29日松山を発って、ジェットスターで成田へ、成田からはカンタス航空でブリスベン→アリス・スプリングス→エアーズロックへと乗り継いでいく予定だった。しかしエアーズロック行きはそんなに簡単なことではなかった。

まず、成田空港での搭乗手続きでの問題。なまじ夫が15年前に行っていたという安心感から、二人ともガイドブックを読むということがなかった。私自身も夫任せで、直前まで仕事などで忙しかったこともあり、全く自分で調べたりしなかった。チケットの手配など頼んだ大学生協の担当者も何も言わなかった。何とオーストラリアへはビザが必要だったのだ。アメリカの電子ビザ同様インターネットで事前にとるものだ。すぐとるように言われ、空港のパソコンコーナーへ行き、言われた通りオーストラリア政府のホームページに入ってお金も払い手続きもしたつもりが、待っていても登録されない。これはおかしいということになり、空港のすでに営業時間を終わっていた JAL パックの窓口にかんたス航空の係の人が直接頼んでくれ、代行してビザを取ってもらった。6300円かかったが、これで行けないことを考えたら仕方ない。夫は詐欺にあったのではないかと、支払いに使ったカードの失効手続きに奔走した。結局申し込んだところは代行業者のサイトで詐欺ではなかったが、本当に冷や汗ものだった。無事ブリスベン行きの飛行機に乗れたときはホッとした。

9時間後ブリスベン空港の国際線ターミナルに着いた。次の飛行機の出発時間まで1時間半しかないが、同じカンタス航空なので、大丈夫だと言われる。入国手続きは、日本のパスポートのような電子パスポートの場合は機械にパスポートを入れ、出てきたカードを次の機械に入れ、写真を撮って終わり。誰も審査しない。入国のゴム印もない。あっけなくオーストラリアに入国。預けた荷物を取ってクレームなしの長蛇の列に並ぶ。やっと出られると思ったら、あちらの列へ行けと言われてしまった。乗継便の時間が迫っている旨説明しても駄目で、また並ぶ羽目になる。10人ずつ荷物と人を並べ、麻薬捜査犬が嗅ぎまわる。終わったら次の10人。我々の番になった時、犬が交代。交代に時間がかかった上に、今度の犬は前の犬よりゆっくり丁寧に嗅ぎまわる。結果ここですごく時間がかかってしまった。でも、搭乗手続きは終わっているし、席も決まっている。

大丈夫だと思う気持ちとひょっとしてという気持ちが交錯する。急いで国内線ターミナルへの移動バスに乗る。着いたとき飛行機の出発時刻にはまだ時間があった。ここでカンタス航空のサービス窓口に行けと言われ、ここで我々が乗るはずの飛行機はもう荷物を預ける時間を過ぎてしまっているの、乗ることはできないと言われる。どんなに交渉しても駄目で、しかもこの日のエアーズロックに接続する飛行機はもうないとのこと。一番早くエアーズロックに行く方法は、1時間後出発の飛行機でケアンズに戻って、明朝の飛行機でエアーズロックへ行く方法だという。選択の余地はない。係の人がこの日に泊まる予定のエアーズロックのホテルに電話をかけてくれて、事情を話しキャンセルしてくれたが、キャンセル料を持ってくれるわけではない。1時間後のケアンズ行と明朝のケアンズ→エアーズロック行の飛行機は振り替えという形でチケットを出してくれた。自分たちにも責任があると認めているということか。私たち以外に同じ状況の日本人がほかにも5人いた。その晩は全く予定になかったケアンズで一泊し、そのホテル代をこちらが持たなければならない。何か割り切れない思いで一杯だった。

飛行機から見る海の色のは美しさは最高だった。ケアンズ着午前11時半。タクシーでとりあえず係の人がいいと言ったホテルに行き、飛び込みで部屋をとったが、取れてホッとした。飛行機の遅延の損害を補償する特約にも入っていたことを思い出し、部屋に入ってすぐ保険会社に電話する。飛行機が6時間以上遅れた場合の補償だということで、今回のケースはあたらなと言われがっかりする。この際、終わったことは忘れ、予定になかったケアンズを楽しむことにした。ということで早速町の散策に出ることにした。

ケアンズは熱帯地方、南国の雰囲気が漂う場所。南半球のオーストラリアは冬から春の時期だと考え、半袖などは出かけの服装しかなかったの、そのままの格好で歩く。海岸に並ぶカフェ、レストランでは多くの人のがのんびりビールやワインを飲みながら海を眺めている。私たちも海岸沿いのレストランに入り、地元のビールを飲み、食事をすることにした。小さな瓶の地元ビール2種類（およそ1本700円）とピザとオーギービーフ（合計3000円）を注文した。物価は日本より少し高いかなと思ったが、高温の気候に冷たいビールはおいしかった。料金は内税になっているので安心だ。チップも不要。

食後は散歩。海岸線に沿った木製の散歩道には、どこでも座れるベンチがずっと並んでいる。海水を利用した無料プールでは多くの人泳いでいる。その脇では舞台の上から大音量で音楽を流している。海岸線に沿ってある公園では健康器具が充実していて、お年寄りも健康維持に努めている。バーベキューの施設がところどころにあり、燃料付調理器が無料で使えるようになっている。子連れの日本人親子に会った。宮崎出身でここに住んでいるとか。暮らしやすいと話していた。何だか生活にゆとりを感じる。

一旦ホテルに戻り、シャワーを浴び着替えて、再び夜の街に出る。ホテルの前はカジノだった。晩御飯は印象に残るものにしようと考え、ガイドブックでここと決めたレストランは何と自分たちのホテルの1階だった。行ってみたら、予約でいっぱいだった。夜の街はナイトマーケットなどにぎやかだった。レストランでは歩道に張り出したテーブル席で人が楽しげに話している。あちこち歩き、結局入ったレストランはお客の入りがいい **Bushfire Flame Grill** という店。海の近くなので思いきり海鮮をとったが、海鮮メニューはほとんどなかったため、地元のビール2本ずつとオージービーフと唯一あった魚料理にした。全部で1万円ぐらいだった。ウエイトレスが日本人とオーストラリア人のハーフで、完璧な日本語で対応してくれたのが印象的だった。

帰ってメールをチェックしようと思ったら、ホテルのwifiは有料、そこで、地域の無料wifiを捜し、何とかつなげて受信メールを読んで、返事など書いて寝る。

次の朝はエアーズロック行の飛行機が7時10分発なので、5時起床。6時からホテルの食事なので、それまでに余裕をもってすべてすませて部屋を出ようと思ったら、夫が眼鏡がないと騒ぎ出した。どこを探してもない。結局思いがけないところ（トランクの中の夫が成田で買ったあられの袋の中）にあったのだが、ぎりぎりセーフというきわどいタイミングで見つかってよかった。朝食は素晴らしく充実していたが、空港行のタクシーの予約時間があったので、早々に切り上げた。まだ旅は始まったばかりなのに、期せずしてあった白いご飯に味噌汁がおいしかった。

無事エアーズロック行の飛行機に乗り、窓からの眺めをずっと見て行った。晴天で、町から少し離れたら、ずっと赤土の砂漠で何もなかった。その中を一直線の道が通っている。ずっと低空飛行なのか本当によく見える。2時間でエアーズロック空港へ。

ケアンズは日本と時差1時間だったが、エアーズロックは時差30分、大きい国は大変だ。ここにはタクシーはない。空港から無料のシャトルバスに乗ってエアーズロックリゾートのアウトバックパイオニアホテルへ。すぐチェックインしてくれた。広い敷地に平屋のホテルの部屋が100番ごとにかたまっている。900番台まであるうちの、318号だったので、フロントから近からず遠からずの場所だった。砂漠の中にあるのに、バスタブもある。驚いた。でも、水は大事にしようと思った。

午後ツアーを申し込んでいたので、それまでの時間地図を片手に歩いた。まず展望台まで赤い砂地の道を歩き、エアーズロックを眺める。それからスーパー、レストランなどが集まっているところへ。歩いて15分ほどの距離だった。スーパーで水など飲み物を確保。水は600ccで250円ぐらい。牛乳は500ccで120円ぐらい。お昼はイタリアンレストランでステーキサンドイッチ（二つで3800円）を食べた。3時過ぎにツアー

のバスが迎えにきた。カタ・ジュタ歩きとウルル（エアーズロックの正式名称）のサンセットを見るツアーだった。まずカタ・ジュタ（先住民の言葉でたくさんの頭という意味）へ。カタ・ジュタは36の巨大奇岩群が外周35kmの中にある。赤い砂岩は6%の鉄分が長い時間かけて酸化したもの。向うバスの中でこの地域では珍しく雨が降ってきて、歩くころにはそれが上がり、雨でできた水たまりに奇岩の隙間の三角の影が映り、素晴らしくきれいだった。1時間ほどの散策で、一番奥まで行けた。それから、場所をウルルのサンセットを見る会場に移し、シャンペンとおつまみをいただいた。ウルルが日没で色が徐々に変わっていくのが面白かった。日が当たると赤く、雲がかかって陰ると黒くなる。コントラストが本当に美しい。アボリジニの一族アナング族が聖地とあがめている場所である。しかし、飛行機乗り遅れで1日ここで過ごすのが短くなり、ウルルに実際に近づくことができなくなったかとちょっとがっかりしていたところ、ツアーのガイドさんが次の日の早朝のウルルサンライズツアーを勧めてくれた。次の目的地メルボルン行の飛行機が昼12:45発だったので、あきらめていたのだが、ツアーの終了が11時17分、朝チェックアウトを済ませて、フロントに荷物を預けておき、11時35分の空港送りサービスも一緒に申し込めば大丈夫だと教えてくれたので、即申し込んだ。

翌朝5:40バスの迎えが来た。国立公園の入り口で3日有効のチケットを窓から示すのだが、係員がいない。探してもいない。ゲートは開いているのだから入れるのではないかと思ったが、それは許されないとのこと。待つこと20分、やっと入れた。日の出を見る場所に日の出までには到着できたが、太陽が出かけたところで、厚い雲が出てきて、刻々とウルルの岩肌の色が変わっていく様子は見られなかった。そのあとバスで高さ348m周囲9.4km世界最大の一枚岩ウルルの周りをまわって、アナング族の聖地ウルルの伝説など聞く。天気が目まぐるしく変わる。雨・曇り・晴天。ウルルに登れるかどうかは、国立公園のレンジャーが決めて、ボードに示す。雨でも、雲が厚くても、風が強くても駄目になる。一週目は駄目。それで、ウルルの岩肌に自然に付いたハート型を見に行く。アナング族が神聖な地としているところ7か所は、写真撮影も禁止されている。2周目も駄目で、今度はアナング族の民族資料館へ行く。3週目も駄目で、ウルルの岩肌に直に触れたり、滝を見たり、洞窟の絵を見たりした。アナング族は文字を持たないので、絵で伝承していたのだ。見終わったところで、登山可になったとの情報が入る。急いで登山口に行くが、とても頂上まで登る時間は残されていなかった。それで、鎖につかまって上る手前まで登って、上から周りの景色を眺めることにした。下から眺めるのと、上から眺めるのでは全く違う。中には三日通ってこの日初めて登ることができたという人もいたので、まあ幸運な方なのだろう。斜度45°は、行きはよいよい帰り

は怖いという感じだった。でも滑らない岩肌で助かった。ほぼ満足してこのツアーを終えて、ウルル空港へ急ぐ。しかしメルボルン行の飛行機は何のことはない 45 分遅れの出発となった。

メルボルン（時差 1 時間）には定刻を 30 分遅れて着いた。約束があったので、すぐタクシーでホテルまで行く。ホテルに着いたのが 5 時 15 分。夜は夫の大学の教え子 N さん夫妻とのお食事会があって、5 時半にお迎えの方がホテルまで来てくださることになっていた。荷物を置き、着替えすぐ下に降りて行く。お迎えの I さんが待っていてくださった。早速車に乗り、メルボルンで有名だというステーキ店 Vlado's へ。夫の教え子は奥さんの方で、社会人から愛媛大学入学、大学院、もう一つ大学院を修了した。大学入学はお子さんと一緒にあったとか。素晴らしい！明るく快活な同世代の方だった。ご主人は商社勤めだったそうで、メルボルンにも住んでいらっしゃったとか。退職後会社をやっている、オーストラリアと日本を行ったり来たりの生活だとか。とても豪快な方で、このご主人にこの奥様というのが納得できた。この日は 1 月に出産予定のお嬢さん、ご主人の商社時代の後輩ご夫妻も一緒の大お食事会となった。ステーキは店の人が肉の見本を見せに来て、そこから選ぶ。ヒレとロースのそれぞれ 600g と 300g がある。私たちはどちらも食べてみたかったので、ヒレとロースの 300g をミディアムレアで頼んだ。おいしいワインにおいしいお食事、そして楽しいおしゃべりで時間があっという間に過ぎて行った。後輩ご夫妻はそのまま帰国のため空港へ、私たちは N さんにホテルまで送っていただいた。素敵なディナーに招待して下さった N さんご夫妻に感謝。またお目にかかる機会があったら、今度は我々がご招待したいと思った。

2 日は午前中ホテルの近くを散策。ホテルはかつて夫が住んでいたところに近いので、地理的によくわかっている。メルボルンのいわゆる市街地ではないが、交通の便はいい。海に近く、散歩するにはいいところだ。近くのコンビニ（ほとんどのコンビニはセブンイレブン）で myki カード（トラム、バス、電車などのプリペイド IC カード）を買う（6 A\$+25A\$チャージ 1 A\$≒90 円）。乗り物に乗るときにタッチすれば一律料金が落ちていく。ただ、メルボルン中心街はフリーゾーンになっていて、この範囲で乗るときはタッチしなくてもいい。我々のホテルはフリーゾーンの外なので、タッチしなければならない。トラムに乗って中心街に出てみた。メルボルン大学の方面に行ってみる。大学街のレストランは比較的安い。カレーカツ丼とすき焼き丼がそれぞれ 600 円ぐらいだった。レジの人も作っている人も中国人のようだった。日本食レストランらしいところはたくさんあるが、恐らく本当の日本食は少ないのだろう。ビクトリアマーケットという大きな市場があるのだが、生憎水曜日で休みだった。フリーゾーンのトラムを利用

して、街の様子を眺めてみた。古い建物と、奇をてらった建物が混在している。特に周辺は高層住宅が建っているが、オーストラリア人は基本一戸建てが好きだということだ。2時ごろフリンダースストリート駅から郊外に延びている線に乗って、今回の旅の目的、15年前に夫がお世話になったY氏のお宅に伺った。夫は当時住んでいた長期滞在型のアパートからレンタカーで来たことがあるとのことだったが、駅から迷わずお宅まで歩いて行けたのには正直驚いた。夫の地理感にはY氏も驚かれた。駅まで車で迎えに来てくださるつもりだったとか。奥様は生け花を教えていらっしゃる。郊外のとても広い庭のある素敵なお宅だった。35年以上も在住で、養老孟もお世話になったとか。Y氏はお酒を召し上がらないが、私たちにまずビールを勧めてくださった。アサヒスーパードライの日本では見かけない小瓶だ。よく見たら中国製だったが味は変わらない。奥様手作りのオードブルに甘いお酒シェリーをいただき、テーブルの方に移動した。奥様はお酒が強いので、私たちは一緒にとってもおいしいワインを飲みながら手巻き寿司や生牡蠣等をいただいた。どれもおいしかった。メルボルンの昔の話、今の話、中国人富裕層の住宅買い占めで、家や土地の価格がウナギ上りだということ、トヨタなどの自動車会社がメルボルン撤退予定で今後日本人もどんどん減っていくだろうとのこと、話題は尽きなかった。奥様が勧め上手なので、ちょっと飲み過ぎてしまったが、本当に楽しい時間だった。帰りはホテルまで全く飲んでいないY氏が奥様と共に車で送ってくださった。

3日はオーストラリア人の旧友が朝8時半にホテルまで迎えに来てくれた。夫はモナシュ大学の研究所にいたのだが、彼はその時の仲間で、日本にも何度も来ている。8月に過酷なキャンニングロードを走破したという車高の高い大きな車に乗せてもらった。夫の希望でユーカリの大木を見せてもらうために、その方面に詳しい他の研究者のお宅へ。そこで車を乗り換えて、森林へ。オーストラリアのサッカーのユニフォームの色はユーカリの緑とアカシアの花の黄色だとか。オーストラリアの運転免許の話、初心者マークはPで赤のPは1年以内、緑のPは3年以内だという。Lは仮免。老人マークの案も出たが、老人からの反対でポシャったとか。色々な話が聞けた。森林は散歩するために遊歩道がつけられていて気軽に人が入れるようになっている。大きいユーカリの木の最高記録は130mとか。2か所森林を見せてもらい夫はご満悦。私はよくはわからないが、その大きさに圧倒されたり、巨大シダに驚いたりした。森林見学を終わり、研究者と別れ、旧友にレバノン料理をごちそうになった。車を運転する彼がワインを飲んだので、大丈夫かと聞いたら、オーストラリアでは仕事がないときはグラス1杯までは飲んでもいいとのことだった。彼は、今は退職し、悠々自適の生活を楽しんでいる。毎日うちの仕事で忙しいらしい。庭の手入れ、修理など。例の大きい車の後ろには道具箱が入

っていて、それが自分のおもちゃだと言っていた。親が亡くなったり、親の介護があったり、私たちと同じように色々なことが彼の身にも起きている。今回彼の奥さんに会えなかったのは残念だったが、お互い元気でいられればそれでいい。

4日からはツアーを入れた。午前中はメルボルン動物園へ行き、シニア割引で入った。ここではシニアは60以上。珍しいカモノハシやコアラ、ワラビー、ミーアキャット、タスマニアンデビル、ウォンバット。蝶の館もあった。アシカショーもあった。アシカショーのアシカはどうしているのだろう。イルカショーのイルカの捕獲が問題となっているので考えてしまった。午後2時10分、指定されたホテルに集合し、フィリップ島のフェアリーペンギン（世界で一番小さいペンギン 平均身長33cm）パレードを見に行くツアー。オーストラリア人で日本語の上手なJさんが運転・ガイドしてくれた。まず、フィリップ島の入り口にあるカンガルー、ワラビー、エミュー、コアラがたくさんいる自然動物園へ行く。犬の一種ディンゴ（秋田犬に似ているがオオカミに近い）もいる。ここで飼われているクジャクが誤ってディンゴのいる柵の中に飛び降りたら、無残な姿になったという話を聞いた。コアラはお金を出せば一緒に写真を撮ってくれるところもある。ビクトリア州の紋章にはエミューとカンガルーが描かれている。エミューもカンガルーも前にしか進めないため前進あるのみという意味を込めているという。カンガルーやワラビーが餌の時間で集まっているところに入って直に触ることができた。

暗くなりかけのところで同じ島の自然公園に移動。フェアリーペンギンは本当に可愛い。子育て中の子に餌をやるため朝巢を出て集団で海に行き、餌を体いっぱい飲みこんで日没と共にまた集団で巣に帰り子に餌をやる。その時の行進が観光名物のペンギンパレードだ。撮影禁止になっている。海岸に見物用として階段状の席が設けられている。海を見ていたら海から上がってほかのペンギンが上がるのを待って行列を作って戻る光景が見られた。そしてかなり遠くの巣までよちよち歩いていくけなげな姿に感動した。

メルボルンは世界一住みやすい街ランキングで4年連続世界1位を維持している。確かに、治安もよさそうだし、交通も整備されていて便利だ。しかし、物価は高い。物価の高さは、人件費の高さと土地、建物などの固定資産の高さによるものだという。給料が高ければ物価が高くても問題ないということか。そんな中今、セブンイレブンとスタバが不法就労者を不法に安い時給で雇っていて、裁判になっているらしい。

5日はヤラバレーのワイナリー巡りとパフフィンビリー鉄道のツアーに参加。朝8時35分ホテルまで迎えに来てくれる。他に別のホテルのカップルを途中で乗せて出発。パフフィンビリー鉄道は遠隔地開拓のために建設された鉄道で、赤字経営の果て1953年地滑りで線路がふさがれたため、廃止となっていたものを地元民の熱意で再開したも

の。現在は献身的ボランティアのお蔭で観光用として連日運行されている。私たちは始発駅ベルグレーブから乗った。蒸気機関車でのおんびりした速度なので周りの景色を存分に楽しむことができる。窓枠に腰かけて両足を出して乗るのが正式な乗り方だと教えられたが、私たちは写真だけとって遠慮した。木橋を通るとき、ガイドさんが下から手を振ってくれた。30分ほど乗って着いたメンジーズクリーク駅で下車。ワゴン車に乗って次の目的地ヤラバレーのワイナリーへ。最初に行ったワイナリーでは昼食と白、ロゼ、赤ワインが試飲できた。どれもおいしかった。ローストビーフ、サラダバーのサラダ、味わい深いパンにオリーブ油を付けて食べるのもおいしかった。このあたりのブドウ畑は本当に低木に矯正されている。葡萄の木の前には必ずバラの木がある。これはバラの木に虫を寄せて、葡萄の木に虫がつかないための方法だという。次にチョコレート工場へ。色々なチョコレートを試食させてくれる。お土産にいくつか買う。次のワイナリーでも試飲させてくれる。ここのワインは賞を取ったそうだがちょっと口に合わなかった。次はスパークリングワインのワイナリーで、フランスのシャンパンモエドシャンドン社がここの気候風土がシャンパン作りに合っていると始めたとか。シャンパンという名詞はフランスのシャンパーニュ地方で作られたものにしか使えないので、同じようなものでもスパークリングワインというしかない。ここでしか作られていない赤のスパークリングワインがおいしかった。持って帰るのは大変だが、うち用のお土産として購入した。帰りもホテルまで送ってもらったが、本当に充実したツアーでよかった。北九州出身のガイドUさんとてもいい人だった。

次の日は日曜日。月曜日にもビクトリアマーケットが休みだと聞いたので、月曜日にツアーを入れ、この日は市内散策とマーケットでの買い物にあてた。まず、トラムに乗って、旧財務省の建物を見学。金塊が置いてあったという地下倉庫跡はそれぞれの部屋が展示資料館になっている。次に近くにある大航海者キャプテンクックの生家に行く。ビクトリア州100周年を記念して、イギリスから移築したという。またトラムでビクトリアマーケットへ。このマーケットは何でもある。値段も様々。有名なオパールのおしゃれな店もある。夫の好きな木製品を売る店はなかなかいいものがあった。多くの人が食料の買い出しに来ていて、帰りには大きい袋を下げてトラムに乗って行く。

月曜日はグレートオーシャンロードのツアーだった。往復500キロの道は長かった。初め夫はレンタカーを借りてここへ来るつもりだったが、Y氏がやめた方がいいと忠告してくださったので、ツアーに申し込んだが、ツアーでよかった。運転していたら景色も見られないし、何よりこの距離は疲れる。美しい海岸線、海の色と赤い岩と波しぶきの白のコントラストが美しい。途中ゴルフ場内の野生のカンガルーを見たり、木の枝に

じっとしている野生のコアラを見たりできた。12 使徒といわれる巨岩の群れを見るところに行く道で、周りの草木に気を取られた夫が転んで口の中を切ってしまった。すぐ観光客の中国人が助けてくれたという。血が止まったところで持っていたマスクでカバーしたが、とんだおまけ付だった。ホテルに帰ったのは8時過ぎ。夫が口をけがしていたので、近くのインド料理のテイクアウトの店に私が買いに行き、ホテルの部屋で最後のメルボルンでの晩御飯を食べた。ちなみにメルボルン滞在中初日を除き朝ごはんは毎日、近くのスーパーで買ったパンとハム、チーズ、バター、トマトでサンドイッチを作り、ホテルについているコーヒーに買って来たミルクを入れてすませているので、ホテルの部屋での食事は珍しいことではなかった。次の日はメルボルンを出る日、来る時飛行機に乗れなかった経験があるので、帰りのシドニー経由羽田行が1時間半しかないのが気になっていた。それで、もっと早い飛行機でシドニーへ行けないか問い合わせたところ、今の段階では空きがあるとのことだったが、変更手続きは電話ではできないので、できるだけ早く空港に行き、早い便のシドニー行に変えてもらうことにした。

8日11時4分ホテルから出るエアポートバスで空港へ。元々のチケットは夜5時45分発だったのを午後1時発の飛行機に変えてもらった。その結果、予想もしなかったシドニー見物も少しできた。空港から二階建てで電車で街に出た(15分)。よくテレビなどで見る有名なオペラハウスも見られたし、王立植物園も散策できた。羽田行の飛行機にも余裕をもって乗ることができたが、何とその飛行機は1時間遅れの出発となった。

羽田からは松山行き JAL に接続していた。しかし着いたのが遅かったため、松山行の時間に全く余裕がなかった。JAL の係員が付ききりで誘導してくれた。預ける荷物も国際線のターミナルで受け付けてくれ、さらにモノレールの無料券もくれ、しかも便利な乗り場所も教えてくれたので、身軽になって指示通りの場所から乗り、国内線のターミナルで降り何とか間に合うことができた、ブリスベンでの全く手当なしのカンタスと羽田での JAL との違いを身をもって味わった旅だった。日本のこの行き届いたサービスをどこでも期待してはいけないことを教訓として覚えておこう。

今回の旅で日本の国力が確実に落ちているのとともに、中国の台頭ぶりを大いに感じた。中国の富裕層の動向が、オーストラリアの経済・生活に大きく影響している。ツアーの大軍団もすごいし、日本語のパンフレットはなくても中国語のパンフレットはどこにでもあるし、色々ある。日本の行く末を色々考えさせられる旅となった。折しも日本の台風、洪水のニュース、阿蘇火山噴火、地震・・・天災に見舞われ続ける日本は本当に大変な国だとも思った。ともあれ、問題満載の今回の旅行はずっと記憶に残ることだろう。

(T. H)

雑感

北海道の大雪山系の紅葉が見頃を迎え、初雪が降ったそうです。

綾でも柿の実が色付き、色とりどりの彼岸花が町内を彩り、サネカズラが実を結び、カラスウリの朱い実が風に揺れています。秋の気配を纏い始めました。美しい季節の足音が日毎に大きくなっています。

9月19日未明、安全保障関連法は参議院本会議で可決されました。

17日16時30分頃。信じられない映像が流れ始めました。

何事が起ったのか理解できませんでした。

参議院特別委員会の鴻池委員長に対する不信任動議が否決され、入室し着席した委員長に歩み寄り、何やら質問している様子の民主党の福山哲郎理事。

その瞬間、大きく手招きする議員の合図で、鴻池委員長めがけ走り寄り取り囲む与党議員。特別委員会の委員以外の議員も多くなだれ込んでいたと言います。

何故か既に安倍総理も着席しています。

慌てて駆け付ける野党議員。

離れた席から、緊張の面持ちの自民党の山本一太議員が手を小刻みに震わせながら、質疑終了と採決の動議を読み上げ、混乱の中、マイクを奪い合いながらも用意周到に筋書きを準備していた与党議員の人の壁の中に守られた委員長が採決を発声。声は聞こえないまま、自民党の佐藤正久筆頭理事が何度も掌を大きく振り上げ、促されるまま起立する与党議員。何事も無かったかのように安倍総理は退室。

これが可決に至った顛末です。

17日夜、各テレビ局が映像を解析し、その時、何が起こったかを詳しく解説してくれたおかげでやっと理解できた次第です。

国の根幹にかかわる法案の採決のやり方の一部始終でした。

15日と16日に行われた、中央・地方公聴会は一体何だったのでしょう。16日の地方公聴会に至っては特別委員会に報告すらされていないということです。勿論議事録も無いそうです。参院史上初めてのことだと言います。公聴会は単なる儀式ですか。失礼の極みです。

国会の外では雨の中、法案に反対する大勢の人達がやりきれない哀しみに包まれていました。

例えば、私が十代の頃も日本は安保闘争の嵐が吹き荒れていました。連日のデモ、大学の封鎖、東大生の樺美智子さんが亡くなったことは子供心にも深く残りました。

それでも、当時は、ごく一部の学生達の過激な運動という捉えられ方でしたし、世の中の殆どの大人たちは 学生の本分を外れている という冷ややかな目で見っていたようでした。ましてや、大学の教職に有る方々や法曹界、文化人が共に行動したという記憶は有りません。

確かに当時の学生たちの行動は日増しに過激さを増していきました。

しかし、最初に学生たちが声を上げ始めた時に、耳を傾け、彼らが何に対して抗議しているかを知ろうとした大人たちがどれほど居たでしょうか。もし、当時、本当の話し合いの場を持つことが出来ていたら、人間は何を最も優先すべきかを判断できる国へと成長できていたかもしれません。

今回、学生、若い母親、仕事帰りの人々、法曹界、大学関係者、知識人、若い人、高齢の人、男性も女性も、ありとあらゆる立場の人たちが、それぞれ自分自身の心に従って集まっています。

半世紀の時を経て、時には軽薄にも思える日々の在り様の中で、人々は確実に何が大切かを考えてきたのだと思います。

それでも、国の指導者たちは、立ち止まって、話を聞こうとはしません。

昨年7月の閣議決定、今年4月の訪米でアメリカに対して約束してしまったことはあまりにも国会軽視だという反発に加えて、6月の衆議院憲法審査会で与党が推薦した早稲田大学の長谷部恭男教授が集団的自衛権の行使は違憲だとしたことでうねりが大きくなったように思えます。長谷部教授が違憲と答えることは解りきったことで、与党に都合の良い発言を期待して長谷部教授に依頼すること自体、与党の無知をあからさまにしているという人も居ました。

大多数の憲法学者、内閣法制局長官経験者や最高裁長官・裁判官の経験者が集団的自衛権の行使は限定的でも違憲であるとしています。

安倍総理をはじめ与党議員の多くは「国民の命、財産、国の平和を守るのは憲法学者ではなく我々政治家だ」「今は私人となっている方のご意見にコメントするつもりはない」と、切り捨てます。

様々な意見があるのは当然です。しかし、現政権がどうしても集団的自衛権の行使が必要であると考えのなら、解釈の変更ではなく、憲法を変えるための手続きを取るべきです。憲法によって縛られるべき政府・与党が自身に都合の良いように解釈を変更し、反対意見を封じ込めることは許されるべきことではありません。

国会では可決されましたが、今後、法廷の場へと移るのは必至の様です。

常々「合憲か違憲かは最高裁が判断すること」という発言を繰り返していた安倍

総理は仮に違憲判決が出た時は潔く従って下さるのでしょうか。

とんでもない変換ミスで、嘗ての東大総長大河内一男氏を一夫氏として前回の雑感に載せてしまいました。高校時代の恩師からの御指摘で初めて気付き、冷や汗が吹き出しました。その一方、今なお指導して下さる師を持つ幸せも又感じたことでした。高校時代、厳しさで定評のある先生でしたが、毎朝のホームルームの時間に必ず読んで下さったエッセイの数々。考え方の多様性の大切さと同時に言葉への興味の扉を開いて下さいました。「山も川も海も元の姿に戻ろうとする。自然災害とされている災害の殆どは人災。」と教えて下さった地理の先生。理系でありながら、物理で追試にさえ失敗した私は、もう一度機会を、と、友人に伴われて物理準備室にお願いに行った時、紅茶とクッキーを御馳走して下さいました物理の先生。

高校時代、素晴らしい先生方、生涯の友との出逢いが有りました。来年の参院選から選挙権が18歳に引き下げられます。高校生たちに素晴らしい出逢いを!と願わずにはられません。

鬼怒川が決壊した常総市、渋井川が決壊した仙台市の様子は目を覆うばかりでした。除染ゴミを保管していた袋まで大量に流出しました。

噴火した阿蘇山。桜島は不気味に沈黙しています。口永良部島の避難生活は続いています。それでも営業運転を始めた川内原発は早くも不具合が発生しました。

国立競技場やオリンピックのエンブレムは白紙撤回されましたが、原発に反対する人たちの声、沖縄県民の声は政府には届かないようです。不思議です。

幼い頃のヤンチャぶりが影をひそめ、とても優しい大五郎。マイペースだけれど我慢強い杏。最高のコンビです。大五郎は食事の前に“おすわり”をすると立ち上がるのに難儀するようになりました。12歳7か月になりました。

先日の“綾の自然と文化を楽しむ”で出かけた林道沿いにはキジョランが自生し、アサギマダラに出逢うことが出来ました。雌雄同時に逢えたのは初めてでした。

裏の木立のクストイゲの小さな黄色い花には数多くの黒いアゲハがやって来ました。今まで私がモンキアゲハだと思っていたチョウの多くはナガサキアゲハでした。

モズが高鳴きを始めました。百舌鳥というだけあって、歌真似上手です。春先程ではありませんが、高鳴きが続いて変化に富んだ歌が聞こえます。 (K.O.)

お知らせ

* ぐらしの学習会では、随時、会員を募集しています。

活動会員 2,000円/年

購読会員 1,000円/年

振込先口座番号 (郵便局) ぐらしの学習会 01610-5-21026

問い合わせ先 TEL/FAX 089-964-6956

E-mail : kt-hayashi@nifty.com

* 次回の例会等、今後の予定については、メールで、お知らせ致します。



編集後記

9月の雨の多さをこんなに感じた年はなかったように思います。実りの秋を迎え、刈り取りの時期を待つばかりになった稲を見ると、この時期の雨は、疎ましくてなりませんでした。ようやく、晴れ間を見つけての刈り取り。我が家の稲は、自家米だけの僅かな量なので、作業は半日程度で終わりましたが、上林の知人宅に行く途中、9月に入ってからの台風で、1/3程度、稲が倒れているのを見ました。随分前になりますが、倒れた稲の刈り取り作業に、3倍以上の手間が掛かったことが思い出されて、人ごとながら、大変な作業になるなあと案じられます。

鬼怒川の決壊の報道がありました。人災なのか、天災なのか、というような報道内容に、危惧が深まりますが、これだけ、様々な技術が進んでいる日本で有り得ないことだと感じずにはいられませんでした。人々が救助される映像報道もありましたが、1機のヘリコプターができることと助けを求める人の多さのギャップに、人間の能力と自然の迫力の違いに、わかってはいるのですが、啞然としました。

平和に暮らせていたはずなのに、国を守るという政治家の言動に不安感をもつ人が多くなってきています。どうか、今までそうであったように、戦争はしない、戦争には行かない、行かせない国でありますように。

シルバーウィークには、秋晴れが続き、行楽日和になりました。学生時代の友人と内子、大州、八幡浜、宇和と一日旅行をしました。妻でも夫でも大人でもなく、青春という頃に戻って、内子の葡萄の甘さに、八幡浜の「塩パン」に「こけむしろ」の静けさに大州の「昭和」にと秋を満喫しました。

皆様の秋は如何ですか。

第91号をお届けします。

(M・T)